

病害虫発生予報 第2号(5月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	もみ枯細菌病による苗腐敗症 ばか苗病 いもち病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ イネミズゾウムシ	並 並並 やや多 並並並 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 黒点病 灰色かび病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ	やや少 並並並 並並 やや少 並並
			カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 チャノキイロアザミウマ	やや少多 やや少 少 並
タマネギ	灰色かび病 べと病 軟腐病	並 やや多 並	モモ	せん孔細菌病 カイガラムシ類	やや多 並
ウリ類	モザイク病 斑点細菌病	並 やや多	果樹全般	カメムシ類	並
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	やや少 やや多 並			

気象予報

1か月予報（予報期間 4月25日～5月24日 大阪管区气象台）

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）>



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (°C)	月降水量 (平年値) (mm)
5月	和歌山 19.3	和歌山 150
	潮岬 19.1	潮岬 249

I. 水 稲

1. もみ枯細菌病による苗腐敗症

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるもみ枯細菌病の本田での発生面積率は0%（平年4%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病ほ場から採種した種子は使用しない。

2. ばか苗病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるばか苗病の本田での発生面積率は0%（平年4%）であった。

② 種子消毒に用いる薬剤の効果は安定している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 種子消毒を行う。

3. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

4. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生時期 並 発生量 やや多
縞葉枯病 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 4月上旬の休閑田における20回振りすくい取りによる平均生息数は、紀の川市で10.0頭（平年7.0頭）、和歌山市で11.7頭（平年6.8頭）、かつらぎ町で9.0頭（平年4.4頭）であった。

② 越冬世代の50%成虫化時期は、紀の川市で3月22日（平年3月24日）であった。

③ 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、和歌山市3地点で平均15.6%（過去8年の平均15.5%）、かつらぎ町で17.4%（同14.8%）であった。

④ 県北部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は18%（平年15%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 第1世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 4月上旬の休閑田における20回振りすくい取りによる平均生息数は、紀

の川市で0頭（平成22.1頭）、和歌山市で2.0頭（平成40.6頭）、かつらぎ町で129.0頭（平成58.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

6. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 那智勝浦町での予察灯による4月1～20日の誘殺数は1頭（平成0.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。
② 5月中旬までに田植えする地域のうち、多発地ではさらに田植え3～4週後に薬剤を処理する。

Ⅱ. 野 菜

<タマネギ>

1. 灰色かび病（白斑葉枯病）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は0%（平成1%）であった。
② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くする。
② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は39%（平成24%）であった。
② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くする。
② 罹病葉はほ場から持ち出して適切に処分する。

3. 軟腐病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 降雨前後を重点に薬剤防除を行う。

<ウリ類>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 施設栽培キュウリにおける4月下旬の発生ほ場率は県北部で0%（過去3年の平均2%）、県中部で0%（平成0%）であった。
② アブラムシ類の発生は平成よりやや少ないと予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. 斑点細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける4月下旬の発生ほ場率は11%（過去3年の平均2%）、発病葉率は0.7%（同0.1%）であった。
- ② 県中部の施設栽培キュウリにおける4月下旬の発生ほ場率は64%（平年10%）、発病葉率は20.0%（平年1.9%）であった。
- ③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設内の換気を良くして湿度低下を図る。
- ② 薬剤防除は予防散布を重点に行う。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のキャベツにおける4月下旬の発生株率は、モモアカアブラムシ4.3%（平年18.8%）、ニセダイコンアブラムシ0%（平年2.4%）であった。
- ② 黄色水盤（紀の川市）への4月1～20日までの飛来数は、26頭（平年32頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のイチゴにおける4月下旬のナミハダニは発生ほ場率57%（平年18%）、発生葉率25.0%（平年6.0%）、カンザワハダニは発生ほ場率43%（平年33%）、発生葉率15.7%（平年11.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ハダニ類はほ場の周辺から侵入するので、外縁部の株において早期発見に努め、初期防除を行う。
- ② 同一系統の薬剤を連用しない。

3. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のイチゴにおける4月下旬の発生ほ場率は14%（平年20%）、1花当たりの生息密度は0.2頭（平年0.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 生息密度の低い時期から薬剤防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 初発日 5月16～25日（並）

発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病率は4.3%（平年18.8%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 葉害対策を講じた上で銅水和剤の予防散布を行う。

② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

2. そうか病

(1) 予報内容 発生時期 並
 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年8月中下旬における果実発病の発生圃率は3%（平年3%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 常発圃や前年多発圃は発芽直後の防除を基本とするが、発芽直後に防除できなかった場合は早急に散布を行う。

② その他の圃では満開期に黒点病、灰色かび病を防除する際、そうか病にも登録のある薬剤を用いる。

3. 黒点病

(1) 予報内容 発生量（初期感染） 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹上および園内外に放置された枯れ枝を処分する。

4. 灰色かび病（開花期）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 常発圃では満開期に防除を行う。

② 開花期～落弁期に曇雨天が続くと発生が助長されるので、必要に応じて防除する。

5. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における4月中旬の発生葉率は0%で、マシン油乳剤を散布している慣行防除圃における発生葉率は0%であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 冬期から春期にかけてマシン油乳剤を散布していない圃では、夏用マシン油乳剤200倍の散布を行なう。

6. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 第1世代1齡幼虫初発日 5月16～20日（並）
 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における越冬量は平年並であった。

② 第1世代1齡幼虫初発日は、予察式 $Y = 57.03 - 0.109X$ により求めた。

ただし、 $X = 3$ 、4月の日最高気温*（11℃超の気温） -11°C の積算、 Y は5月1日を起点とした日数であり、 $Y = 15.1$ 日（予察ほ場の樹上における実際の初発日の平年は17.0日）であった。

※予測式に使用した日最高気温は、3月1日～4月26日まで本年の実測値を用い、4月27～30日は平年値を代用した。

7. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、由良町）における4月21～25日の黄色粘着トラップによる越冬成虫の誘殺頭数は1頭（平年1.4頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イヌマキやサンゴジュなど防風樹の近くで発生が多い。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 前年10月の「富有」の発病葉率は22.5%（平年32.7%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発した園では、この時期の防除を徹底する。

② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。

③ 菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬剤は葉裏をねらって丁寧に散布する。

2. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報根拠

① 前年10月の「富有」における発病葉率は5.2%（平年4.2%）で、発生園率は47%（平年30%）であった。

② 前年10月以降、巡回調査園以外で多発および早期落葉した園がみられた。

③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 子のう胞子飛散は5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。

② 5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報根拠

① 前年10月の「富有」における発病葉率は3.2%（平年22.5%）で、発生園率は47%（平年84%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。

② 円星落葉病と同時防除できる。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における4月1～20日の黄色粘着トラップによる誘殺数は1頭（平成4.8頭）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 落弁期を中心に防除する。

② イヌマキやサンゴジュなど防風樹の近くで発生が多い。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の4月中旬の春型越冬病斑形成枝の発生園率は20%（平成7%）
発病枝率は1.0%（平成0.2%）、発病葉率は1.2%（平成0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 春型越冬病斑形成枝は葉への伝染源となるので、可能な範囲で剪除する。

② 果実発病は、5月以降の降雨により多くなるので、降雨前の予防散布を徹底する。予防散布ができなかった場合、降雨後できるだけ早く薬剤散布を行う。

③ 本病の防除薬剤のうち、マイコシールドは連用すると葉先の黄化を生じることがあるので注意する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の4月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ雌成虫寄生枝の発生園率は30%（平成26%）、寄生枝率は0.9%（平成2.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹体生育期における防除適期は、第1世代のふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の少し前に薬剤散布を実施する。

② 近年のふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが5月1～5日頃、クワシロカイガラムシが5月中旬頃である。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 落葉中におけるチャバネアオカメムシの平均越冬成虫数は、落葉50リットル当たり0.3頭（前年2.1頭、平成0.4頭）であった。越冬成虫の捕獲地点率は23.4%（前年51.1%、平成16.8%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

② ウメ、モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。

③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。

④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害状況を観察して防除する。

- ⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室のウェブページ内
農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や各地域の農業振興課、JA等の
情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。